

ディスカバリーサービスの検索履歴から見る ユーザー動向

株式会社サンメディア
馬淵沙織，長谷川智史

1. 研究の目的

最近利用が広がるディスカバリーサービスは、今までのデータベース検索の検索手法とは異なり、Google等の検索エンジンのように検索ができる。ProQuestが提供するSummon(サモン)は日本語検索では形態素解析を用いるなど従来のデータベース検索からは検索方法が大きく異なる。Summonを利用する機関も約40機関と広がりを見せている。本発表では2013年第30回MIS沖縄大会の大谷周平氏の研究を元に継続研究を行った。今までと異なる検索手法を、検索履歴と検索語入力の傾向からユーザー動向の分析を試みる。

2. 調査対象

Summonの日本のユーザーを対象とし、日本のユーザーの検索傾向を探る。2014年1月から12月までの1年間を対象とし、Summonの利用統計を出力したデータを分析した。

1年間の検索総ユーザー数 731,701

1年間の検索総回数 5,053,368回

3. 調査の結果

1年間のデータは膨大なため、大谷氏と同様に無作為に4日間の検索ログを抽出し分析を行った。

検索語 25,760種類

検索語から日本語と英語を比較すると2/3が日本語という結果となった。

また、検索語数平均は日本語(1.31語)と英語(4.45語)と違いがあった。

検索演算子を使った検索は2%未満であった。

4. 考察・今後の課題

日本語検索に限定するならば、1語検索が主流であり、検索演算子等を用いた複雑な検索はディスカバリーサービスでは使われていないことが分かった。ディスカバリーサービスが検索をする際に、検索語から深めるだけでなく、ファセットなどの検索サポート機能を提案しているためという事も考えられる。

今後は海外のユーザーとの利用動向比較につなげたい。

以上